

「滑稽な才女」の肖像  
-ランブイエ嬢アンジェリック・クラリス

田島俊郎

Un portrait d'une *Précieuse Ridicule*  
- Angélique-Clarice, Mademoiselle de Rambouillet

Toshiro TAJIMA

**Résumé**

On appelle ordinairement *préciosité* la littérature mondaine française du XVII<sup>e</sup> siècle. Mais il faut noter que le mot *précieuse* n'apparaît pour la première fois qu'au milieu des années 1650. Ce serait donc un anachronisme, si nous appelons le salon de la Marquise de Rambouillet des années 1630 *le salon précieux*.

Angélique Clarice d'Angennes, Mademoiselle de Rambouillet, était la cinquième et la dernière fille de la Marquise de Rambouillet, sœur cadette de Julie d'Angennes. Tallemant des Réaux a dit que Mlle de Rambouillet était un des originaux des *Précieuses*. S'agit-il des *Précieuses Ridicules* de Molière? Tallemant des Réaux, Madeleine de Scudéry, Mademoiselle de Montpensier, Somaize ont laissé des témoignages sur elle. Nous regardons les portraits de cette *précieuse*.

## はじめに

形容詞「プレシューズ (précieuse)」およびその名詞形「プレシオジテ (préciosité)」は、ラテン語 pretiosus 由来の「高価な」「貴重な」「精巧な」の précieux から派生した語で、文学美意識に限定して「気取った、凝った」「(17世紀の)才女たちの」を意味する。この語義は、1650年から1660年にかけての気取りの文学風潮を揶揄する意とし派生した。この語が文学美意識の語として定着したのは、1659年初演のモリエールの『滑稽な才女』(Les Précieuses Ridicules de Molière)<sup>1</sup>の功績である。本来皮肉として使われ始めたこの義は、価値を再逆転させて、時代の観念の枠を超えてフランス文学一般に見られる洗練や純化への指向の意にも解される。この再派生的な語義を説明するためにフランス文学史は、アンリ4世の宮廷の粗野さを避けるために自邸にサロンを開いたランブイエ邸のサロンの文化がプレシューな文化であり、サロンがプレシオジテの中心だと定義する。1650年に使われ始めた語を1650年代には開かれていなかったアランブイエ夫人のサロンや、ランブイエ邸の中心人物であり1648年に死んだヴォワチュールの呼称に使うことは、時代錯誤である。ランブイエ夫人やジュリー・ダンジェンヌ、ヴォワチュール等をプレシューと呼ぶときには、語は1650年代の揶揄する呼称としての précieuse ではない。

実は同時代人たちにプレシューズと認識されていた人物はそれほど多くはない。福井芳男は言う「プレシューズたちについての情報は非常に少ないので、プレシューズという現象はサロンのほんの小さな部分に限定されていたのではないかと疑うほどである。この現象が社交界全体を揺るがしたと考えるのは難しい。」<sup>2</sup> ところが語が揶揄する呼称として使われた時代に、ランブイエ邸の

<sup>1</sup> *Les Précieuses Ridicules* の題名の訳としては『才女気取り』(中央公論社版)、『滑稽な才女たち』(臨川書店版)がある。中央公論社版所載の「日本におけるモリエール」によれば、『地獄おとし』という翻案や『似而非才女』の訳もあったが、昭和初年からは『才女気取り』が定訳であった。ridicule の形容詞は vraie と fausse を分けているのではなく、précieuse=ridicule と解しうるので「滑稽な才女たち」の訳名を借りる。この劇の梗概を付す。

パリに到着したばかりの Magdelon と Cathos の田舎娘 (pecques provinciales) は、求婚者 La Grange と Du Croisi を冷たくあしらって憤慨させる。La Grange は自分の召使い Mascarille が才人として通っていることを利用して復讐を企てる。Mascarille は身分を侯爵と偽って田舎娘たちのサロンを訪れ、滑稽に詩や音楽の才をひけらかし、二人の賞賛を得る。Mascarille と相棒の Jodelet の芝居が最高潮に達する頃、La Grange たちが Mascarille たちを棒で打ち、召使いの身分を明かす。

<sup>2</sup> Fukui, p.21.

中に、プレシューズと呼ばれた人物がいた。タルマン・デ・レオ (Talleyrand des Réaux) がランブイエ夫人の末娘アンジェリック・クラリス・ダンジェンヌ (Angélique Clarice d'Angennes, Mlle de Rambouillet) をプレシューズと名指ししている<sup>3</sup>。アンジェリック・クラリスとはどのような人物であったか。アンジェリック・クラリスを介して、プレシューズはどう認識されていたか見て行こう。

### Précieuse=語について

語の成り立ちについて概観する<sup>4</sup>。

### 定義

同時代の辞書の定義を確認する。参照するのは 1680 年の Richelet、1690 年の Furetière、1692 年の Académie である。

Richelet は女性名詞 *précieuse* に、語そのものが否定的であるとの定義を与えている。

この語は肯定的な形容を伴うときでなければ悪い意味で取られる。そして肯定的な形容を伴うときには、言語に洗練し、ものごとに通じ、才を恃む女性を指す。しかしこの意味では、プレシューズの語はかなり稀である。この語を形容なしあるいは不愉快な形容を伴って使う場合は、その身振りや言葉で揶揄されるに値する女性を指す<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> Tallemant des Réaux, II, p.894.

<sup>4</sup> 本章の *Préciosité* 概念については Lathuillère に負う。ほかに Adam、Fukui を参照した。

小論では煩瑣にならぬように初出以降のフランス語名称は訳語または固有名詞はカタカナで表記するが、語そのものが問題になる場合はフランス語で表記する。*précieuse* は語を問題にし、「プレシューズ」の場合はいわゆる才女たちを表す。

<sup>5</sup> 原文は以下の通り。Précieuse, s.f. Ce mot, à moins que d'être accompagné d'une favorable épitète se prend toujours en mauvaise part et lorsqu'il est accompagné d'une épitète favorable il veut dire celle qui raffine sur le langage, et qui sait quelque chose et qui se pique d'esprit mais comme dans ce sens le mot de précieuse est assez rare, lorsqu'on se sert de ce mot sans épitète, ou avec une épitète fâcheuse il signifie celle qui par ses manières d'agir et de parler mérite d'être raillée. [*Les véritables précieuses* auroient tort de se piquer lorsqu'on joue les ridicules. Molière, *préface sur la comédie des précieuses ridicules*. Est-ce qu'il y a une personne qui soit plus véritablement qu'elle ce qu'on appelle précieuse à prendre le mot dans la plus mauvaise signification. Molière. Elle est précieuse depuis les piez jusques à la tête. Molère, *Critique de l'Ecole des Femmes*, scène deuxième. (sic)

否定的な形容詞を伴うときはもちろん、形容詞なしでも否定的な意味であるとする。原文に示したように、否定的な語義が発生した原因としてモリエールを引用している。

*Furetière* は形容詞の女性形として定義するが、本来肯定的であった語の価値が下落したと言う。モリエール以前は肯定的に使用されていた語が、模倣者によって価値を下落させられ、形容詞としてこの語自体は「まがい物でわざとらしい (*factice et affecte*)」の意として通用していると定義する。

以前は、世間と言語を熟知した非常な才と徳のある女性に与えた形容詞である。しかしほかの女性たちが模倣し、また様式の行き過ぎで、語の価値は下落し、これらの女性たちを才女気取りあるいは滑稽な才女と呼び、モリエールが喜劇に、ドゥ・ピュールが小説に仕立て上げた<sup>6</sup>。

1692年の *Académie* は *prix* の派生語として *précieuse* を「様子や身振りそしてことに言葉において粧った女性」<sup>7</sup>と定義する。定義は中立的だが、用例はやはり否定的な使用例とモリエールの『滑稽な才女たち』を上げている。

このように 17 世紀の辞書は、*précieuse* の語は否定的な形容詞を伴うことが多いと定義しており、17 世紀後半には、語は単独では中立的ではなく否定的な側面が意識されていたことを示している。否定的なニュアンスの原因としてモリエールの『滑稽な才女たち』の影響を挙げる。モリエール以後はモリエールによって固定されたプレシューズ像が一般的であったことがわかる。しかし、初めてプレシューズたちに滑稽な面を発見し揶揄したのはモリエールの創案なのか、それとも以前から揶揄されていた滑稽なプレシューズたちの姿を舞台上で再生したのか？ モリエールは序で「真のプレシューズを下手に真似る滑稽なプレシューズを演じたからといって腹を立てるのは間違いでしょう」ととぼ

<sup>6</sup> 原文は以下の通り。 *Precieuse: est aussi une epithete qu'on a donné cy-devant à des filles de grand mérite et de grande vertu, qui sçavaient bien le monde et la langue: mais parce que d'autres ont affecté et outré les manières, cela a descrié le mot et on les a appellées fausse precieuses, ou precieuses ridicules, dont Molière a fait une Comédie, et de Pures un Roman. On a appellé aussi un mot precieux, un mot factice et affecté, une manière extraordinaire de s'exprimer. (sic)*

<sup>7</sup> 原文は以下の通り。 *Précieuse. s.f. Femme qui est affectée dans son air, dans ses manières, et principalement dans son langage. C'est Precieuse, il n'est rien de plus incommode qu'une Precieuse. La comdedie des Precieuse ridicules. (sic)*

ける。だが、笑いは観客との共犯関係を前提としているのだから、観客たちには *ridicule* と形容されるプレシューズと呼ばれる人たちを頭に思い浮かべていたに違いない。

### モリエール以前

プレシューズたちを話題にしたのはモリエールが最初ではない。モリエール以前、*précieuse* の語はどう理解されていたのか。モリエールの初演前後、プレシューズに関する作品は以下のようなものがある。

	作者	作品	備考
1656 年	Michel de Pure	<i>La Prétieuse, ou le Mystère des ruelles, dédiés à telle qui n'y pense pas</i>	国王允許は 1655 年
	Abbé d'Aubignac	<i>Nouvelle du temps ou Relation du Royaume de Coquetterie, privilège du 15 janvier 1656</i>	国王允許は 1656 年だが、印刷は 1659 年
	Michel du Pure	<i>Les Précieuses, comédie en italien représentée par la troupe italienne du Petit-Bourbon. Non imprimée</i>	印刷されず
	Samuel Chappuzeau	<i>Le Cercle des femmes, Lyon, chez Michel Duhan, 25 avril 1656.</i>	
	Saint-Evremond	<i>Le Cercle, Londres, 1706</i>	
1658 年	Maulévrier か	<i>La Carte des Précieuses in Recueil de pièces en prose les plus agréables de ce temps, privilège du 8 janvier 1657, Paris, Sercy, 1658.</i>	Sercy の集に収められる以前、1656 年には演じられていないはず。
1659 年	Subligny か	<i>Le Balet de la Déroute des Précieuses, Mascarade, Lasselin, 1659.</i>	印刷より前には演じられていないはず。
	Anne-Marie-Louise de Montpensier	<i>Le Portrait des Précieuses in Divers Portraits, imprimé à Caen, 1659.</i>	
	Molière	<i>Les Précieuses Ridicules</i>	初演は 11 月 18 日。

1660 年	B. de Somaize	<i>Le Grand Dictionnaire ou la clef de la langue des ruelles</i> , Paris, Ribou, 1660	
-----------	---------------	---	--

Cuénin, p.174-176.による。

## 初出

これらの作品に先立って *précieuse* が新語として文字に初出するのは 1654 年である。後の書簡作家セヴィニエ夫人の夫の伯父である Renaud (chevalier) de Sévigné が 1654 年 4 月 3 日付けのサヴォワ公妃宛の書簡の中で報告している。

「パリにはプレシューズと呼ばれる娘や女性たちがいます。彼女らは素晴らしく度の外れた隠語や身振りを持っています。彼らの国を航海するための海図が作られてもいます。」<sup>8</sup> この証言が *précieuse* のこの意味でのもっとも古い用例のようである<sup>9</sup>。

セヴィニエの引用から、1654 年にはプレシューズと呼ばれる女性たちが存在していたことがわかる。誰がどのような意味で誰を対象に呼び始めたのか。アダン (Antoine Adam) によると、語はルイ 14 世の叔父であるオルレアン公ガストン (Gaston d'Orléans) の娘モンパンシエ嬢 (Mademoiselle, Anne-Marie-Louise, duchesse de Montpensier) の近辺で使われ始めたという。モンパンシエ嬢はドーマル嬢 (Mlle d'Aumalle) とランブイエ嬢 (Angélique-Clarice de Rambouillet) の様子を滑稽に真似た *La Déroute des Précieuses* という題名のバレエをガストン・ドルレアンの前で上演させた<sup>10</sup>。またガストン・ドルレアン

<sup>8</sup> 原文は以下の通り。「Il y a une nature de filles et de femmes à Paris que l'on nomme Précieuses, qui ont un jargon et des mines, avec un déhanchement merveilleux: l'on en fait une carte pour naviguer en leur pays.» *Correspondance du chevalier de Sévigné et de Christine de France*, lettre XC, p.246. cité par Adam, *Histoire* II, p.26. n.2. この証言は Lathullière, p.30. も Fukui も引いているが、Adam と Fukui の引用は *démancement* (原義は脱臼) とするところを Lathullière は *dehanchement* (原義は腰を振ること) としている。いずれも規格はずれの様子を形容しているのだろうが、*déhanchment* には媚が窺える。

<sup>9</sup> なお、ここに言及される海図は、*Les Précieuses Ridicules* 第 4 場で Cathos が言及する Madeleine de Scudéry の Clélie の *La Carte de tendre* を想像するが、相前後して類似のものが提案されていた。1654 年の始めには Gaston d'Orléans の宮廷にいた Maulévrier という人物が *La Carte du Royaume des Précieuses* を書いている。Carte du Pays de Braquerie (1654 年)、*La Relation du Royaume de Coquetterie* (abbé d'Aubignac, 1654) などが 1654 年 8 月のスキュデリー嬢に先行する

<sup>10</sup> Adam, *Histoire*, II, p.26-27. また Adam, *La Genèse des «Précieuses Ridicules»*, p.24-28. Lathullière, p.61. Cuénin, p.85-91. 参照。ただしモリエールの *Pléiades* 版の編者 Couton はこの作品をモリエールの成功以後に書かれたと考えている。

の宮廷にいた詩人 Maulévrier が、*La Carte du Royaume des Précieuses* を書いている<sup>11</sup>。さらにモンパンシエ嬢自身が、自ら好んで書いたポルトレという形式による *Portrait des Précieuses* を残している。アダンによれば、いずれも印刷は遅れるが、1654 年から 1655 年前後には書かれていた。オルレアン公の宮廷では否定的な意で使われている<sup>12</sup>。

## ポルトレ

これらのうちモンパンシエ嬢によるポルトレを見てみよう。ポルトレはスキュデリー嬢が *Grand Cyrus* や *Clélie* で流行らせたジャンルだが、モンパンシエ嬢は 1657 年頃盛んに作らせ、あるいは自ら作った。モンパンシエ嬢の手による 16 編を含む 59 編が、1659 年に 30 部だけ印刷された<sup>13</sup>。ポルトレは個人の特徴を描写するものだが、プレシューズについては、個人を特定せず、集団に共通の性質を語っている。

フランス人が新しい物好きでも確かにこのセクトは追随されまい。なぜならこのセクトは一般的にみなに嫌われているのだから。(略)

その場にプレシューズが一人しか居ないようならば、この人は憂鬱に沈み込んでしまうことだろう。あくびをして、話しかけられたことに返事をせず、返事をしても深く考えずに話しているのだと見せるためにちぐはぐだったりする。もしそのことをとがめ立てするような大胆な人だったり、あるいは彼女が言ったことに注意を促すような親切な人が相手だったりすると、あれ、おっしゃることは考えておりませんでした。そんなことできまして。」など

<sup>11</sup> Cuénin, p.73. 印刷は 1658 年、Sercy の詩歌集に採録された。Recueil de pièces en prose les plus agréables de ce temps, Paris, Ch. de Sercy, 1658. Adam, *Histoire*, loc.cit.あるいは Tallemant des Réaux, I, p.321. note 11.

<sup>12</sup> ランブイエ邸に代わってパリの文芸の中心になっていたスキュデリー嬢(Madeleine de Scudéry) のサロンが、いわゆるプレシオジテ趣味の源泉であったとされる。Adam は *La Genèse des «Précieuses Ridicules»* で、précieuse をドービニャック (abbé d'Aubignac) 等がスキュデリー嬢を攻撃するために使った呼称である、ドービニャック等が、スキュデリー嬢とそのパトロンであるフーケに対する攻撃のためにモリエールに『滑稽な才女たち』を演じさせたのだ、とする。

これに対し Lathuillère は、Adam が拠り所とするドービニャックや Mlle des Jardins のテキストはモリエールが成功したあとの記述であり、時間的に矛盾があり、原因と結果を取り違えている批判する。Lathuillère, p.124. また Cuénin, p.XXX-XXXI.

いずれにせよ否定的な意味での précieuse の語の発生源はスキュデリー嬢のサロンではあり得ない。

<sup>13</sup> Adam, *Histoire*, II, p.52.

と高笑いで答える。あるいはその場にもう一人プレシューズがいようものなら、自分たちがその場での第一人者ではないことなど思いもせず、一緒に皮肉を言ったり、近くのを攻撃したりする。それも誰一人として例外とせずに、非常に大胆に。というのはこれらがもっとも堪え難い他人を鼻で笑う振る舞いなのだから。

この人たちはほとんど独自の言語を持っていて、それを使わない限りは理解できないという代物である。他の人が行ったことや言ったことを言い直すべを見つかる。誰の行動も一般に評価しないのである。(略)

これらは策略として行われている。というのはこのお嬢さんがたには夫は稀で、彼女たちの間で結婚は一世紀に一回しか起きないような稀なことなのです。この女性たちの大部分の櫃は、彼女たちが機知では持っていると感じている程の富で一杯だということではありません。

(略) 彼女たちは大変な皮肉屋で冷笑家です、たとえそうされるべき理由を持たない人に対しても<sup>14</sup>。

個人ではなく一群の人々の肖像なのであるから、語られる言動や性格は抽象化、一般化された性質を表現していると言って良いだろう。プレシューズたちに共通な性質として、1) 態度が高慢であること、2) 内向きであって感性が異なる相手とは交流しようとしめないこと、3) 語彙や発音の差異に敏感であること、4) 結婚という制度に対する嫌悪感を表明していること、などを挙げている。これらはモリエールの滑稽な才女たちの特徴でもある。モリエールがこのポルトレを参照したことはありそうなことである。結婚についていえば、この時代の上流階級の結婚は、両性の情念と合意に基づくものではないのだから、押し付けられた結婚への嫌悪感から結婚という制度そのものへの拒否感は自然で、モリエールはこの先何度も取り扱うことになる。

### アンジェリック・クラリス、ランブイエ嬢

モンパンシエ嬢のポルトレに描かれたプレシューズのモデルと目される人物がランブイエ邸にいた。ジュリー・ダンジェンヌの末の妹であるアンジェリック・クラリス (Angélique Clarice d'Angennes) である。この人物がモリエールのあの滑稽な才女たちのモデルなのか。タルマン・デ・レオはアンジェリック・

<sup>14</sup> Cuénin, p.79-84.



クラリスを「プレシューズたちのモデルの一つ」<sup>15</sup>だと言う。アダンがアンジェリック・クラリスに言及するが、モリエールが直接アンジェリック・クラリスを観察し素材にしたという証拠は提示していない<sup>16</sup>。モリエールのモデルがアンジェリック・クラリスだったかどうかはわからない。メナージュ (Gilles Ménage) は、『滑稽な才女たち』初演の場にアンジェリック・クラリスが居た、と証言する<sup>17</sup>。ランブイエ邸の他の重要人物より前にアンジェリック・クラリスの名を上げていることから、モリエールが創造した人物とアンジェリック・クラリスその人には関連性がある、とメナージュは考えていたのだろう。

アンジェリック・クラリスはランブイエ侯爵夫人の6人目で末子で、5番目の娘である。幼い頃は、次姉である Louise-Isabelle が院長をつとめるエール (Yerres、Hierre または Hyères と綴られることもある。)の修道院に預けられていた。長姉であるジュリー・ダンジェンヌが結婚してモントジエ夫人 (Julie d'Angennes, Mlle de Rambouillet, puis madame de Montauzier) となった1645年以降、ランブイエ邸に呼び戻されて、ランブイエ嬢と呼ばれるようになった。アンジェリックの名と赤い髪をアンジェリック・ポーレ (Angélique Paulet) から受け継いだようである<sup>18</sup>。疱瘡の痕が目立ったため美しいとは評されていない。

### タルマン・デ・レオ

アンジェリック・クラリスについての証言はタルマン・デ・レオやスキュデリー嬢、ソメーズなどが残している。これらの証言を見て行こう。まずはタルマン・デ・レオによる描写。

ランブイエ嬢は修道女になることを望んではいなかった。姉のランブイエ嬢が結婚してからエールの修道院から戻された。この人はアンジェリック・クラリス・ダンジェンヌという名前だった。ポーレ嬢が名付けられたのである。ついでに赤い髪も与えたのだろうと思う、というのも赤毛の人物は彼女以外にいないのだから。カツラをかぶれば髪はどうにかなった。しかし疱瘡

<sup>15</sup> «Mlle de Rambouillet, un des originaux des *Précieuses*», Tallemant des Réaux, II, p.894.

<sup>16</sup> Adam, *Genèse*, p.25-27.

<sup>17</sup> «J'étais à la première représentation des *Précieuses Ridicules* de Molière, au Petit-Bourbon. Mlle de Rambouillet y était, Mme de Grignan, tout le cabinet de l'Hôtel de Rambouillet, M. Chapelain et plusieurs autres de ma connaissance.» cité par Mongrédien, I, p.112. ただしこの証言は30年ほど後であり、このランブイエ嬢がグリニャン夫人であると念を押す。

<sup>18</sup> Tallemant des Réaux, I, p.473.

の痕はこの方をかなり損なっており、そのため少しも美しくなく、非常にほっそりとした体型しか（利点は）持つてはいなかった。機知に富んだ人で時にとても面白いことを言った。しかしいたずら好きのところもあって、姉のように礼儀正しいどころではなかった。それでも友情に厚いということである。この人については、ヴォワチュールとプレッシューズたちの項で語ることにする<sup>19</sup>。

アンジェリック・クラリスが赤毛であったこと、カツラを使っていたことは、モンパンシエ嬢のポルトレの「(才女たちを描写するのに)カツラを使っている才女がいても、灰色がかった金髪か、明るい黒毛であれば、ほっといてあげますが、赤毛の人がつけるのはどうなのでしょう。」<sup>20</sup>の描写と呼応するだろう。タルマン・デ・レオが予告するこのプレッシューズの逸話は、残念ながら残されていない。

### ヴォワチュール

プレッシューズに関する逸話が残っていないのは残念だが、ランブイエ邸で活躍したヴォワチュールとアンジェリック・クラリスの若い頃に関する証言は残している。ヴォワチュールは姉ジュリー・ダンジェンヌに続いて末の妹アンジェリック・クラリスにも恋心を寄せていた。アンジェリック・クラリスがエールの修道院から連れ戻される前、何度か修道院を訪ねている。ヴォワチュールによるアンジェリック・クラリスあての書簡は残されていないが、1644年頃のランブイエ侯爵夫人宛てへの書簡などで、言及している。エールを訪ねる途中で道に迷ったヴォワチュールがエールにいるアンジェリック・クラリスを夢想したと伝える。

ヴァラントン [原注、エールへの道筋にある小邑] への私の道程について我を張ったのは正しかったようです。私がそうしたいと思っても迷えないと私に請け合われた、実に真っすぐなこの別の道筋で、そうしたいと思った訳でもないのに昨日は3度も迷ってしまいました。どういう風にしてそうなったのか申し上げられませんが、奇妙にも私は想像の中にダンジェンヌ嬢とサン＝メグラン嬢を見ており、あの方たちを、常に私の前を歩き、私を迷わせ

<sup>19</sup> Tallement des Réaux, I, p.473.

<sup>20</sup> Cuénin, p.80.

ながら照らしだす熱いもの〔鬼火〕のように見ておりました<sup>21</sup>。

同じく 1644 年のランブイエ邸の執事シャヴァロッシュ (Jean de Chavaroché)宛の書簡で、妹の裁判について支援を依頼しながら言う。

ランブイエ嬢もあなたと彼女のために（というのは私は彼女の件をもうあなたの件ということにしていますので）、あなたに懇願することをお断わりにはならないでしょう。そしてあなたがこのことを心にお止めになれば、彼女は期待し得るあらゆる解決策を持つものと疑いません。お返しに、命の続くかぎり私はあなたを「豚」(porceau)と呼ばないだろうと、また私の名をつけることになる最初の祭壇をあなたに差し上げると約束いたします<sup>22</sup>。

シャヴァロッシュもジュリー・ダンジェンヌに思いを寄せていた<sup>23</sup>。シャヴァロッシュを「豚」と呼ぶのは、エールの修道院にヴォワチュールと同じように入り出していたために聖アントニウスの持物 *Attribut* を諷している。この書簡からシャヴァロッシュはこのあだ名を好んではいなかったとうかがわれる。このあだ名を折り込んで、ヴォワチュールがエールの修道院に預けられていた頃のアンジェリック・クラリスについて歌ったとも想定される Rond が残っている。

宿命の錘(つむ)がしばらくの間あなたの小さな鼻面をつかんでいる修道院から恋人たちは身を引き、パリは嘆き、あなたの美しさを惜んでいる。サン・トマも涙に暮れているとか。

宮廷や、宮廷の美しいものにもかかわらず、私はここで墓の中にでもいるように、できれば修道院のどこか秘密の場所にいたい。

ほとんど骨と皮になって、日に三度は子牛のように泣いています。賭け事からも、隠れんぼからも隠れて。でもあなたについてポンセットとお噂してい

---

<sup>21</sup> Ubicini, I, p.419.

<sup>22</sup> Ubicini, I, p.414-415.

<sup>23</sup> 「もう若くはなかったモントジエ夫人は出産の際非常に苦しまれたことを覚えている。そこで長いこと夫人に恋心をいただいてシャヴァロッシュをサン・ジェルマン修道院に Sainte-Marguerite の帯を取りに行かせた。」 Tallemant des Réaux, I, p.466. 聖マルガリタは妊婦の守護聖人である。

ます。時には「修道院の豚」とも。<sup>24</sup>

ポンセットはランブイエ邸の門番の娘、激しやすかったので修道院に預けられていたという。「修道院の豚」は先に見たようにシャヴァロッシュ。錘(fuseau)は人生の隠喩。ローマ神話のパルクは錘で人の運命を紡いだ。鼻面(museau)は動物の顔であり豚(pourceau)と呼応して選ばれている。Saint-Thomas はランブイエ邸の住所 Saint-Thomas du Louvre の換喩。不在の想われ人をお互いに身近な人に言及して楽しませる詩である。ただ、このロンドがヴォワチュールの手によるものかどうかは疑問が残る。ヴォワチュールがロンドを流行させたのは1638年から1639年であるが<sup>25</sup>、1645年7月のジュリー・ダンジェンヌの結婚より少し前のアンジェリック・クラリスについて歌ったこのロンドは時期外れであり、1639年の *Recueil de divers rondeaux* にも1650年の *Les OEuvres de Monsieur de Voiture* にも収載されていない。手沢本に注を残しこのロンドの解釈に有用な情報を残したタルマン・デ・レオもこのロンドには言及していない。マーニュ (Emile Magne) が Conrart の資料から発掘し、ヴォワチュールの評伝で紹介するまで印刷されていない。

ヴォワチュールとシャヴァロッシュのランブイエ邸の娘たちを巡っての反目は、決定的な事件で終わる。直接の原因は不明ながら二人はランブイエ邸の庭

---

<sup>24</sup> 原文は以下の通り

De l'abbaye ou le fatal fuseau  
Tient pour un temps votre petit museau,  
Tous les Amants en ont fait leur retraite,  
Paris s'en plaint, et vos beautez regrette,  
Et Saint Thomas, dit-on, s'en font en eau.

Malgré la Cour, et ce qu'elle a de beau,  
Je suis ici comme dans un tombeau,  
Et voudrais estre en quelque part secrette  
De l'Abbaye.

Je n'ay quasi que les os et la peau,  
Trois fois par jour je pleure comme un veau,  
Je fuy le jeu, meme cligne-mussette;  
Mais je discours de vous avec Poncette,  
Et quelques fois avec le pourceau  
De l'Abbaye.

Magne, p.257., Lafay, II, p135-136.

<sup>25</sup> 田島

で刃傷沙汰を起こす。タルマン・デ・レオの証言を聞く。

彼（ヴォワチュール）ほどに争った勇者はいない。と言うのはヴォワチュールは4度までも決闘に及んだからである。昼から夜から、太陽の下であるいは月の光で、あるいはたいまつの下で。（中略）四番目で最後の決闘がランブイエ邸の庭でたいまつの下で、屋敷の家令であるシャヴァロッシュ相手にしたものであった。彼らのけんかは、屋敷に三姉妹がいた頃からお互いに抱いていた嫌悪感に起因するものであった。（中略）しかし彼らを争わせることになったのは、若く身分が高いお嬢さんと見ると機嫌を取らずにはいられないヴォワチュールが、ランブイエ嬢が修道院を出るとすぐにからかい始めたことであった。シャヴァロッシュはすこし嫌な思いをしていたか、ヴォワチュールを害することをうれしく思っていたか。ランブイエ嬢は姉のように彼らをしっかり抑制することができず、ヴォワチュールに好意を抱いているかのような様子を見せていた。私（タルマン・デ・レオ）は彼らがほとんどいつも羽根つきをして遊んでいるのを見、また一緒に遊び、話したものだ。最後の場合は彼らを好きにさせていたものだった。ヴォワチュールは多分この娘をしかるべくほど良識的でなくするのに貢献したのだろう。（中略）ヴォワチュールは何か私にはわからないことでシャヴァロッシュを押し。我慢する様子を見せるとヴォワチュールがそれを利して臆病と思わせようとするだろうと知っていた押された方は、手に剣を取って太股に傷を付けた。人々がちょうど良く駆けつけてきた。というのはヴォワチュールの召使いの一人がシャヴァロッシュを後ろから刺そうとしていたからだ。ヴォワチュールは相手が自分を傷つけたことを認めなかった。彼らを引き離そうとした召使いが傷つけたのだと言っていた<sup>26</sup>。

シャヴァロッシュもヴォワチュールも、歳も身分も離れた娘に想いを寄せ、ついには手の届かない真珠を巡って傷つけ合うことになった。分別をなくした二人の争いは別にして、タルマン・デ・レオはアンジェリック・クラリスについて「しかるべくほど良識的でない」と評していることに注意しよう。修道院から戻ってきたばかりの娘に、年長で揶揄の才能と経験豊かな *coquet* の影響を見ている。ヴォワチュールはこの騒ぎの結果ランブイエ邸への出入りを禁じられ、ランブイエ邸に戻れないまま 1648 年に死亡する。

---

<sup>26</sup> Tallemant des Réaux, I, 495-496.

### プレシューズなアンジェリック・クラリス

モンパンシエ嬢のポルトレはプレシューズたちへの敵意をあからさまにしているが、タルマン・デ・レオもアンジェリック・クラリスを「良識的でない」と評すところを見ると、好意的な関係ではなかったようである。メナージュの逸話でランブイエ嬢の言動を語る。

それから1年かそこらして、ランブイエ嬢はこの人物に対して奇妙な挨拶をした。「あなたのお話の中に私をお入れになったと聞きました。好ましくありませんので、良いことであれ悪いことであれ私については話題にされませんように」。私（タルマン・デ・レオ）にしてみれば、もしランブイエ嬢が私にそう言うようなことがあれば、たとえどんなに長くかかることになるとしてもこの方が結婚されるまでは、ランブイエ邸に足を踏み入れなかったことだろう。だがメナージュ氏はそこまでは進まず、モントジエ氏の食卓でランブイエ嬢と食事さえしていた<sup>27</sup>。

タルマン・デ・レオが、自分が書き留めている逸話集の主要な舞台であるランブイエ邸の重要人物について、この人がいる限り足を踏み入れないと評するとは、アンジェリック・クラリスの語調がよほど高飛車だったのか。タルマン・デ・レオはアンジェリック・クラリスの言動をよほど快く思っていなかったのだろう。

モンパンシエ嬢のポルトレに対応したようなアンジェリック・クラリスの言語感覚についてもタルマン・デ・レオは証言を残している。

彼女を快く思わぬ貴族は少なくなかった。一度宮廷から来た誰かに向かって大きくこう言ったことがある。「なにか飲み物が必要だわ、だってそれなしではここで間もなく死んでしまいそう。」ランブイエ嬢がいるときにはモントジエ氏には会いにいかない、ランブイエ嬢はなにか méchant な言葉を聞くと失神するのだからと公言する人物がいた。ほかの誰かはランブイエ嬢に向かって話しながら、長いこと avoine という語について、avoine, aveine, avene

<sup>27</sup> Tallemant des Réaux, II, p.331. メナージュは1652年頃レ枢機卿と仲違いしているが、それから1年程あと。Adam, *Histoire*, II, p.107.

のいずれか迷っていた。「avoine, avoine、一体全体このうちではどう話してよいものやら」。ランブイエ嬢はこのいやみを面白く思い、それ以来そのためにその人物を好んだ。<sup>28</sup>

下品な言葉に気を失ったり、発音を細かく指摘したり、言葉使いに敏感である。なお avoine (燕麦) は語源は avena で、いずれも地方によっては 19 世紀まで使われていた。

アンジェリック・クラリスは、1658 年 4 月 29 日、グリニャン伯 (François-Adhémar de Monteil, comte de Grignan) に嫁ぐ。以後グリニャン夫人と呼ばれる。結婚あるいは肉体的な関係に対する拒否もプレシューズたちの特徴である。モリエールの Magdelon と Cathos は結婚までの過程に時間をかけるように要求するし、モンパンシエ嬢のポルトレのプレシューズたちは結婚そのものを否定している。アンジェリック・クラリスの結婚も話題になったようで、その初夜はグリニャン伯の武勳 (exploits) と呼ばれていたらしい。タルマン・デ・レオの証言。

それほど昔のことではないが、ランジェ氏 (M. de Langey) がドーマル嬢 (Mlle d'Aumale) と結婚しようとしているとの噂があった、さらにその妹のドークール (Mlle d'Haucourt) 嬢と結婚も語られた。そしてこのうぬぼれ男に言わせたものだった「少なくとも、この娘のようにおとなしくて信心深ければ、子供が生まれたときに私の子供ではないなんてことは言われまいだろう」。これが次のような評判の出所である。リールボンヌ氏 (M. de Lillebonne) がプレシューズであった故デストレ嬢 (feu Mlle d'Estrée) と結婚したとき、グリニャン氏がプレシューズたちのモデルの一人であるランブイエ嬢と結婚したときにグリニャン氏について言われたことと同じことが言われた。つまり結婚式の夜に大いに武勳を挙げたのだと。モントジエ夫人はプロヴァンス地方にいた妹に「こちらではあなたに対してと同じような中傷がリールボンヌ夫人についてされています」と手紙で知らせた。グリニャン夫人は、プレシューズたちの評判を回復するに手段は一つしか知りません、ドーマル嬢がランジェと結婚することでしょう、と答えた。<sup>29</sup>

<sup>28</sup> Tallement des Réaux, I, p.467.

<sup>29</sup> Tallement des Réaux, II, p.894.

このランジェは性的に不能を理由に妻に離婚を要求されていたので、結婚の性的な面に否定であったプレシューズたちは、夫が不能でも貞操堅固だと下世話に認識されていたのだろう。アンジェリック・クラリスの初夜がグリニャンの武勲と噂されるとは下品である。

### スキュデリー嬢

ランブイエ邸の人々に対しては好意的であるタルマン・デ・レオだが、アンジェリック・クラリスに対しては否定的な描写であった。モリエールの滑稽なプレシューズたちの憧憬の的であったスキュデリー嬢と、プレシューズの語の指し示す範囲を広げたソメーズの描写を見てみよう。

スキュデリー嬢も *Le Grand Cyrus* の中で、アンジェリック・クラリスを Anacrise の名で描写する。

アナクリーズは非常に美しい体つきではあるが姉上ほどは大きくはない。その肌の輝きは驚くほど、その肌の繊細さは並外れていて、もしこの方が完璧に美しく素晴らしく立派な目をお持ちでなかったとしたら、その肌をおおいに賛嘆し、多くの賛辞を捧げたことでしょう。でも、アナクリーズご自身は美しく愛らしくはあったのだけれど、その顔つきには、精神的で、繊細で、立派で、誇り高く、意地悪そうで、穏やかな何か良くわからないものが混じり合っていて、それが心地よく視線を引き止め、この人を恐れさせると同時に愛させることになっていたのは確かだというのは間違いありません。それはこの方が寛大ではないとか優しささえお持ちではないということではありません。でもこのかたの優しさは男友達に喧嘩を仕掛けるのをためらうようなそれではないので、アナクリーズは多分大いに恐るべきなのです。だってこの方のそれほど繊細で独特の冷やかしをお持ちの人は誰もいないと想うのですから。この方がおっしゃる心地よくも辛辣なことの中には想像力の偉大な火と素朴さが混じっているのです、それもとて容易に、ほとんど探すことなく、無造作におっしゃるものですから、この方を存じ上げない人は熟考した上でおっしゃっているのか疑ってしまうほどなのです。でもこの方は自分で言いたいと思うことしかおっしゃらなかったし、からかうために使う言葉の本当の意味を完璧にご存知でした。また自分が言うことを聞く人が多かれ少なかれ感じとり、自分の望む効果を及ぼさないことがないように、自分の声と顔の動きを上手に指揮することがおできになりました。



アナクリーズにとって、満足させるものは少ししかなく、気に入る人は少ししか居ず、その好みにかなう喜びはほんの少ししかないので、一年のうち一日中幸せで過ごせるように物事が完全に整うなんてことはほとんどあり得ません。それほどこの方は微妙な想像力と甘美で特殊な趣味と満足させるのが難しい気質をお持ちなのです。それでもアナクリーズはとても幸せなのでその悲しみさえも気晴らしなのです。というのはこの方が、田舎で過ごした一日の長さや、良い話し相手のいない午後の長さを大げさに話されるのを聞く時は、ほんとに心地良さげにほんとにかわいらしくお話しになるので、感嘆せざるには居られませんし、この人ほどの機知のある人物を、好意的な評価を与え、会話を認める相手の選択で気難しいからと言って、容赦しないことはできません<sup>30</sup>。

スキュデリー嬢のサロンはモリエールの滑稽な才女たちの憧憬の的であったが、スキュデリー嬢自身は自らをプレシューズと認識していなかっただろう。そんなスキュデリー嬢にとっても、アンジェリック・クラリスは気難しい相手であったようである。悪徳を美德と想わせる持って回った描写である。

### ソメーズ

ソメーズ (Antoine Baudeau de Somaize) の記述も見てみよう。モリエールの成功に触発されたソメーズは、1660年から61年にかけてプレシューズ関連本を劇作3点、『プレシューズ事典』3版を出したが、その生没年も不明で、正体は良くわからない。1856年版の編者リヴェ(Livet)は、『プレシューズ事典』出版の允許が有利な条件で出ていることから、この作品の背後には強力な後ろ盾があったと推測している。『プレシューズ事典』出版のしばらく後には足跡が途絶えている。マザランの姪でルイ14世との悲恋の相手であったマンチーニ嬢(Marie de Mancini, la connetable Colonna)の秘書としてイタリアに同道したのだろうと言う<sup>31</sup>。『プレシューズ事典』では、アンジェリック・クラリスはRozelindeの名で記述されている。この名はランブイエ夫人を指すのだが、アンジェリック・クラリスはこの名を継承している。

ロズランド(ランブイエ夫人)には娘が二人居る。一人はメナリード(ジュ

<sup>30</sup> *Le Grand Cyrus*, t. VII, 1. 1<sup>o</sup>, p. 499. cité par Lathullière, p. 117.

<sup>31</sup> Livetによる Préface, p. xxxiii.

リー・ダンジェンヌ) という名で既に話した。もう一人は勇敢なガリマン(グリニャン) としばらく前に結婚した。(中略) 妹のロズランドに移ろう。この人は姉と同じくらい才気を持っていて、その美德はガリマンを引きつけ、ガリマンは賞賛の気持ちを捧げた後、その奉仕の報いとして結婚の同意を得た。その家は常に詩神たちの住処であり、才人の安息の場であった。美德はそこでは常に賞賛され、徳は今もなおヴァレール(ヴォワチュール) の時代と同じ配慮を受けている。<sup>32</sup>

ガリマンすなわちグリニャンに勇敢なという形容がつくのはなぜだろう。タルマン・デ・レオが伝えるアンジェリック・クラリスとの初夜を武勲と例える噂に呼応しているのだろうか。

ソメーズは1660年には *précieuse* また *précieux* を肯定的な表現として用いて、適用範囲を広汎に拡大させた。アダムは、『事典』はこの時代のパリのサロンのリストとしては役に立つが、重要な2点において文学史家を欺いてきた、と言う。すなわち、ソメーズが『事典』で挙げた名前を本当にそれらの人物が名乗っていたと思わせたこと、もう一つはソメーズがプレシューズに起源を持つと主張する語彙は現実の観察によるのではなくでっち上げられたこと。ソメーズは3世紀にわたって繰り返されたプレシオジテについての過ちの原因である、とする。<sup>33</sup>

### アンジェリック・クラリスのその後

アンジェリック・クラリスは1658年グリニャン伯爵と結婚。1663年7月には娘 Julie Françoise を得るが、翌1664年12月22日、幼い娘を残して死亡。夫グリニャンはその後、二人目の妻を亡くして三人目の妻としてセヴィニエ夫人の娘<sup>34</sup>を迎える。グリニャンの名はむしろ、セヴィニエ夫人の書簡の相手であるこのグリニャン夫人によって記憶されることになる。

### 最後に

「プレシューズのモデルの一人」と名指しされるアンジェリック・クラリス

<sup>32</sup> Somaize, I, p.209-210.

<sup>33</sup> Adam, *Histoire*, II, p.29. et note.

<sup>34</sup> «C'est qu'enfin la plus joile fille de France épouse. Toutes ses femmes(de M. de Grignan) sont mortes pour faire place à votre cousine.» Lettre de Mme de Sévigné adressée à Bussy-Rabutin du 4 décembre 1668. Sévigné. p.105.

の姿をタルマン・デ・レオの証言を中心に見てきた。アンジェリック・クラリスとモリエールの滑稽な才女たちの類似点が多い。マスカリーユが揶揄するカトーとマドロンの、1) 態度が高慢で、2) 感性が異なる相手とは交流しようとせず、3) 語彙や発音の差異に敏感で、4) 結婚には消極的、といった特徴は、モンパンシエ嬢がポルトレで描くプレシューズたちにも、アンジェリック・クラリスにも共有されている。メナージュの『『滑稽な才女たち』の初演にランブイエ嬢つまりグリニャン夫人がいた』<sup>35</sup>という証言が事実を伝えているかどうかは別にしても、あえて名指しするところを見ると、舞台の上のプレシューズたちとアンジェリック・クラリスの類似性は、同時代の人々には明らかだったのであろう。

一般的に語の洗練や趣味の洗練の指向を *préciosité* と呼ぶならば、*précieuse* 的な趣味は、この語義が派生する前から存在していたことは間違いない。そういった趣味の中心であるランブイエ夫人の娘として育ったアンジェリック・クラリスには、マスカリーユが言うように、生まれながらにして習わなくとも趣味が身に付いていただろう。しかし甘やかされた娘が気ままに振る舞う姿に周囲は好意的ではなかったようだ。モリエールは、パリ娘の矜みにならった田舎娘をからかう、と言うのだが、本当にからかっていたのはパリ娘の矜みだったのではないか。*précieuse* の語は、1650年代に気ままに振る舞う娘たちを指す否定的な意で使われ始め、モリエールが広め、ソメーズが意味をずらした。フルチエールは「以前は、世間と言語を熟知した非常な才と徳のある女性に与えた形容詞である。しかしほかの女性たちが模倣し、また様式の行き過ぎで、語の価値は下落し」と定義するが、どうなのだろう。モリエールがとぼけて存在しない「真のプレシューズ」を措定し、ソメーズが意味をずらして、語の価値はむしろ高められたのではないだろうか。(2008年9月22日)

## 書誌

ACADEMIE: *Le Grand Dictionnaire de l'Académie Française*, seconde édition, Paris, Coignard, 1695. (Slatkine Rreprints, 1968)

ADAM (Antoine): *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, del Duca, 1962.

---

<sup>35</sup> 上記、注17参照。

- ADAM (Antoine): «La genèse des *Précieuses Ridicules*» dans *Revue d'histoire de la philosophie et d'histoire générale de la civilisation*, jan-mars. 1939, p.14-46.
- FUKUI (Yoshio) (福井芳男): *Raffinement précieux dans la poésie française du XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Nizet, 1964.
- FURETIERE (Antoine): *Dictionnaire Universel, Contenant tous les mots françois, tant vieux que modernes, et les Termes de toutes les Sciences et des Arts*, La Haye et Rotterdam, Arnout et Reinier Leers, 1690, (reprint, SNL-Le Robert, 1978)
- LATHUILLERE (Roger): *La préciosité, étude historique et linguistique, tome I, position du problème - les origines*, Genève, Droz, 1696.
- MAGNE (Emile): *Voiture et l'Hotel de Rambouillet, les années de gloires (1635 - 1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930. (Nouvelle édition).
- MOLIERE, *Les Précieuses Ridicules, documents contemporains, lexique du vocabulaire précieux, édition critique par Micheline Cuénin*, Genève et Paris, Droz et Minard, 1973. (Cuénin と表記)
- MOLIERE, *OEuvres complètes I, texte établi, présenté et annoté par Georges Couton*, Paris, Gallimard, 1971.
- MONGREDIEN (Georges): *Molière recueil des textes et des documents du XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, CNRS, 1973.
- RICHELET (Pierre): *Dictionnaire François, contenant les mots et les choses, plusieurs nouvelles remarques sur la langue françoise; Ses Expressions Propres, Figurées et Burlesques, la Prononciation des Mots les plus difficiles, le Genre des Noms, le Régime des Verges: avec Les Termes le plus connus des Arts et des Sciences, le tout tiré de l'usage et des bons auteurs de la Langue françoise*, Genève, Jean Hreman Widerhold, 1680, (Slatkine Rreprints,1994)
- SOMAISE (Antoine Baudeau de): *Le dictionnaire des précieuses, nouvelle édition, augmentée de divers opuscules du même auteur relatifs aux Précieuses et d'une Clef historique et anectdotique, par Ch.-L. Livet*, Paris, Jannet, 1856.
- TALLEMANT DES REAUX (Gédéon): *Les Historiettes, édition établie et annotée par Antoine Adam*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1990.
- VOITURE (Vincent): *OEuvres de Voiture, Lettres et Poésies, nouvelle édition revue en partie sur le Manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux des éclaircissements et des notes, par A. Ubicini*, Genève, Slatkine, 1967, (Réimpression de l'édition de Paris, 1855) (Ubicini と表記)

VOITURE (Vincent): *Poésies, édition critique publiée par Henri Lafay*, Paris, Didier, 1971. (Lafay と表記)

『モリエール全集』 (鈴木力衛訳) 東京、中央公論社、1973年

『モリエール全集』 (ギシュメール、廣田、秋山共編) 京都、臨川書房、2000年

田島俊郎：「ヴォワチュールのロンド注解」、『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』 第4巻 (1993年3月) 183頁-231頁